

「内村鑑三『日本及び日本人』を読む」

眞壁 仁

二〇一〇年度の丸山記念比較思想研究センターの読書は、二〇一一年三月三日、一〇日の二回にわたって開かれた。同月二十四日にも最終回の第三回目を予定していたが、一日に発生した東日本大震災、その後の福島第一原発の事故、および関東地方での計画停電の実施のため、センターの判断により開催はやむなく中止された。

今年度の読書会のテキストには、日清戦争の最中に執筆し出版された内村鑑三の英文著作の *Japan and the Japanese* (日本及び日本人、一八九四年一月刊) の日本語訳を選んだ。参加者募集のチラシにも記したとおり、「戦後」非戦論に転じた内村は、一九〇八年四月にこのうちの数章を削り、*Representative Men of Japan* (代表的日本人) と改題して再版し、一九二二年にも再刊している。関連書としては、改題改版の日本語訳『代表的日本人』(岩波文庫、一九九五年)とその翻訳者、鈴木範久氏の『代表的日本人』を読む(大明堂、一九八八年)(巻末付録として初版と改版の異同を示した英文本文を収録されている。ただし改版で削除された序章は収録せず、本文でも検討されていない)

がある。今回あえて丸山記念比較思想研究センター読書会のために選書した理由と意図は、三つある。

第一に、比較思想研究センターが主催して開講している授業などの最近の主題との連続性を考えた。平石直昭氏による「福澤諭吉の東洋政略論を読む」(前年度読書会、明治初年から「脱亞論」までの東洋政略)、中田喜万氏による「武士道」の幻を追って(今年度授業、新渡戸稲造『武士道』から遡る)、また丸山文庫顧問の宮村治雄氏が「解説」をつけられた萩原延壽・藤田省三『瘦我慢の精神—福沢諭吉「丁丑公論」「瘦我慢の説」を読む』(朝日文庫、二〇〇八年)(前者は西郷の評価を扱う)が出版され、それをめぐる別の読書会も開催された。近代日本の東洋政略論・武士道・西郷評価——福澤の次の世代で、新渡戸と同世代のそれらをめぐる内村認識を扱うことは、重複が多いという出席者の関心にも継続性において応え得るのではないか。

第二に、二〇一一年三月は内村鑑三生誕一五〇年にあたり(彼の誕生日は太陽暦で三月二三日)、各種の講演会・シンポジウムなどの記念

行事、あるいは記念出版が予定されていた。しかし、「現代的意義」を問う顕彰事業ではなく、近代日本の歴史のなかで生きた内村の思想をとらえてみたい。思想家の達成点、完成された思想体系とその評価ではなく、雑多な諸要素が混在した状況からある思想が生成され、発現していく過程に、またその変化と展開のプロセスに着目し、さまざまな制約をもつ所与の時代と空間のなかで「生きた思想」のすがたを描き出したいと考えた。それは、丸山眞男が思想史の方法論として、とりわけ日本の思想史研究を行う際に「思想が創造される過程のアンビヴァレントなところ」「その思想の到達した結果というものよりも、むしろその初発点、孕まれて来る時点におけるアンビヴァレントなもの、つまりどっちにいくかわからない可能性、そういったもの」に着目することに合致しているであろう（丸山「思想史の考え方について」一九六一年）。丸山は日本の思想史という大きな単位での課題を前提に語っているが、一人の思想家の評価、さらにはその思想家のある時期とその後の時期の展開の評価についても、似たような指摘ができるのではないか。そのような「アンビヴァレントなところ」に着目するような思想史の学びを、あるテキストを素材に行ってみる。

第三に、その題材として選んだ日清戦争の最中に出版された内村鑑三のテキストを、「戦中」と「戦後」の認識の対比のなかで、あるいは「戦前」と「戦中」「戦後」の比較のなかで読んでみようとする。よく知られた『代表的日本人』ではなく、当初の『日本及び日本人』として読んでみることで、その思想変化の過程を追おうとした。日清戦

争の「戦中」に、内村が課題としたものは何か。そして「戦後」の思想転回には、それ以前の要素のなかに生かされ、なにが否定されたのか。ある出来事に直面して人間が大きく認識を転回させていく場合、それは当然、それ以前に彼や彼女が積み上げた経験と認識を土台になされているはずである。内村にとっても、日清戦争の「戦中」と「戦後」のあいだには、決して大きな思想的断絶の溝ばかりがある訳ではない。むしろそこには、連続する側面がある。それをひとこと、「ナシヨナリズム」である、と言って済ませてしまうことは簡単である。そして、多くの論者は、思想が転じて「非戦論」の立場をとるにも、かわらず、「戦中」の「ナシヨナリズムの残滓」が「戦後」にもみられると指摘する。「最初の執筆時の時代状況が強く反映し、……改版された『代表的日本人』にも、まだ色濃いナシヨナリズムがみられる」（鈴木範久「解説」、岩波文庫、二〇二頁）。この読書会を通して確認しようとしたことは、その一貫するナシヨナリズムの質の問題である。「戦前」「戦中」の内村においても、まだ「どっちにいくかわからない」「どっちの方向にもいきうる可能性」の思想的要素があった。それが、かれ自身の経験と反応して、ある方向が強調されていく。彼が日清戦争の直後から、日本に厳しい批判を加えるのは、それだけ彼の「戦中」の日本への期待が高かったためであり、しかしそれが現実に裏切られたからでもある。その期待値と現実の大きな落差が、彼の思想的飛躍とその後の評論の原動力になっているのではないか。

読書会では、出席者による朗読を交えながら、配布資料をもとにテ

キストの内容紹介と背景説明、叩き台として担当者の解釈を示して、参加者に意見を求める形をとった。第一回は、これまでの『代表的日本人』の解釈を紹介したのち、「戦中」の認識と題して、日清戦争を文明と野蛮の戦争と評した福澤や『時事新報』、徳富蘇峰、陸羯南ら当時の知識人たちの認識とそのなかでの内村の時評とテキストを位置づけた。具体的には初版テキストに付録として収録されていた「Justification of the Corcan war」（朝鮮戦争の正当性）により、この戦争を「義の為めの戦い」とし諸外国に「東洋に於ける進歩主義の戦士」日本に対する支持を要請した彼の認識をおさえた。本文の検討では、この版からは削除された第一章「The land and the people」（国土と国民）からはじめ、内村が日本の国民性として「Greatness（偉大さ）」と「Originality（獨創性）」（とくに「作因的な、また創造的な」獨創性）の欠如を指摘する一方で、秩序・慎重・寡黙・勤勉・節約や「平和な家庭生活」の追求という点に国民の美点を認め、それを「Greatness in small things」としたことを確認した。彼によれば、日本人も「傑出した国民になる可能性」を有している。『日本及び日本人』の目的は、「代表的日本人の研究をとおして、「大和魂」の諸局面を紹介すること」、それを通して国民への「勇ましき雄々しさ」を示し、西洋列強への条約改正要求を承認させることにおかれていた。第二章「西郷隆盛と新日本」においても、おもに「天」の命をうけた者による維新革命の叙述と、執筆時の日清戦争における正義の遂行の認識の重なりを検討した。

第二回は、「戦前」から「戦中」へ——日本の道徳とキリスト教の理解——を主題とした。アメリカ留学時代を含む日清戦争の「戦前」から「戦中」への、日本と内村自身の状況変化は、彼の日本の伝統観にどのような影響を及ぼしているのか。アメリカ滞在中、アマースト大学入学直前に、内村は「大和魂」の道徳的特徴を英文雑誌に寄稿している（一八八六年一月）。ここでは、「孝」・「忠」・「愛」（仁）という三つの道徳的価値が論じられる。その後、アマースト大学で総長ジュリアス・H・シーリーの示唆を受けて（第二の回心）を経験し（一八八六年三月）、また帰国後には不敬事件（一八九一年一月）をおこし、そのうえで、日清戦争の直前と戦中に、英文の *How I became a Christian*（余はいかにしてキリスト信徒となりしか、一八九五年五月刊）と今回のテキスト『日本及び日本人』を著した。第三章から第五章までの「封建領主」上杉鷹山、「農民聖人」二宮尊徳、「村の教師」中江藤樹の記述と関連著作を扱いながら、（一）陽明学とキリスト教の類比を含む、日本の「天」や「自然」をめぐる理解、（二）「忠義」の事例として引照される、家庭における妻（日本の花嫁）の役割理解、（三）内村と問題関心を重ねて記された、新渡戸稲造の *Bushido: The Soul of Japan*（武士道…日本の魂、一八九九年刊）との比較、（四）キリスト教と他宗教との決定的な相異点の理解を中心に、「戦中」に至るまでの内村の日本の伝統思想の解釈を検討した。

第三回は、「戦中」から「戦後」へ——「Greatness in small things」と「小なる日本」を予定していた。『日本及び日本人』には、キリス

ト教での中心主題である罪の赦しは記されないが、日本の偉人たちの「偉大さ」の背後に彼ら自身の「弱さ」の自覚があることが述べられていた（第一章でも日本の欠点が記されている）。非戦論への転回要因については多くの研究があるが、人間の「偉大さ」と「弱さ」の自覚の相関関係も、「戦後」の思想転回への隠れた水脈になっているのではないだろうか。『余はいかにして』を含む「戦中」の著作の記述にみられる、ちいさいもの、小さなこと、些細なこと、とるに足らぬこと——そのような「小事における偉大さ」を、日本の独自性として自覚することにかけた期待が、徳富蘇峰の「大日本膨脹論」への対論を強く意識した、「戦後」の内村の「小なる日本」（「人は皆齊しく日本の大を称ふ、余輩は惟り其小を唱へんと欲す」）の主張につながっていく過程を推論し、検討するつもりであった。内村は留学中から、神の摂理により日本の国民性に「固有の天与の賜物」が与えられているとの確信を強めていたが、初版テキストでは序章の日本の greatness と originality の問いかけに呼応し、終章としておかれていたのが“Japan: its mission”（日本の天職）だった。自らの半生との重ね合わせを窺わせる第六章の「仏僧」日蓮の記述、その後の仏教理解の変化（さらには矢内原忠雄『余の尊敬する人物』の日蓮像との比較）と預言者像の提示とともに、読書会の最終回では、この「戦後」の「日本の天職」の意味内容の変化と展開を、一九二四年の同名の著作まで視野に収めて読み取ることを目指していた。日本とその国民の「天職」を論じる議論は当時少なくなき、たとえば同時期の陸羯南の国際的な「国民の

特立」論や「国命説」にもみられるが、それらと比較しても内村の認識の独自性が明らかになったであろう。

テキストを『代表的日本人』として読めば、たしかにトーマス・カーライルの *On Heroes and Hero-worship, and the Heroic History*（英雄及び英雄崇拜、一八四一年）の影響を無視できない。だが初版の主題と構成からは、「英雄」的な「独自の宗教的（キリスト教的）人間像」やキリスト教受容の一類型としての「接木型」の提示だけではない意図が浮かびあがる。今回、「戦後」に改版される以前の、「戦中」の『日本及び日本人』のテキストに、内村の思想展開の原型を読み取ろうと試みたが、結局未完に終わってしまった。参会者の皆様に担当者として申し訳なく思うとともに、私見に対する十分な批判を受ける機会を逸してしまったことが残念でならない。

東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター
2010年度 読書会 参加者募集のご案内

東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センターは、読書会を企画、開催し、学内外の方々にご参加いただいております。2010年度も、下記の要領にて参加者を募集いたしますので、ご案内いたします。

- テーマ : 内村鑑三『日本及び日本人』を読む
- 講師 : 眞壁 仁 氏 (北海道大学 法学研究科 准教授)
- ねらい

内村鑑三は、1908年に、日清戦争の最中に出版した英文著作 *Japan and the Japanese* (1894年11月刊) から数章を削って *Representative Men of Japan* と改題して再版し、1921年にもそれを再刊しました。日清戦争後の非戦論への一大転回は、彼の日本観に、なにか変化をもたらしたのでしょうか。よく知られた『代表的日本人』としてではなく、当初の『日本及び日本人』を日本語訳で読んでみることで、執筆当時の内村の認識とその後の展開を考えてみたいと思います。このテキストには、キリスト教受容の台木となる陽明学、武士道、「仁政」、「自然」、天道、正義愛の理解、ピューリタニズムや預言者像の読み込み、さらには強い愛国心と世界進出の壮志に至るまで、初期内村の日本の伝統解釈とさまざまな思想が現れます。「二つのJ」の鋭い内面的緊張が現れる途上の作品ですが、その後の変化を視野におさめつつ、彼の思想の原型となるものを読み取ってみましょう。

○ テキスト

内村鑑三(鈴木範久訳)『代表的日本人』(岩波文庫、1995年)は各自ご購入ください。その他の資料については、こちらで用意いたします。

*英文本文は『内村鑑三全集』第1巻・第3巻(岩波書店、1981・1982年)に収録されています。

○ 日 程

第1回 :	3月 3日 (木)	午後2時~3時30分
第2回 :	3月10日 (木)	”
第3回 :	3月24日 (木)	”

○ 場 所 : 24号館1階 24101教室

○ 参加費 : 無料

○ 人 数 : 30人

○ 申込方法

下記の申込書にご記入のうえ、2011年2月4日まで(当日消印有効)に教育研究支援課宛
ご郵送ください。

○ 結果通知

2月中旬に結果通知はがきをお送りいたします。申し込み多数の場合は、抽選となりますので、
あらかじめご了承ください。

○ ホームページ

<http://office.twcu.ac.jp/facilities/maruyama/index.html>

○ 申込および問合せ先

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

東京女子大学 教育研究支援課 電話 03-5382-6293

月～金・9時～17時(11:25～12:25を除く)

下記にご記入いただいた個人情報は、当該公開授業の運営及び当センターの行事案内送付のためのみに利用いたします。

----- き り と り -----

2010年度 丸山真男記念比較思想研究センター読書会 申込書

ふりがな 氏名		年齢		性別	男・女
住所	〒				
電話番号					

東京女子大学 丸山真男記念比較思想研究センター